

白いインディアンになったイギリス人
—— 18世紀の北米大陸におけるインディアン・トレーダーに関する一考察 ——

岩 崎 佳 孝

An Englishman Who Became a White Indian
A Study of an Indian Trader in Colonial America

Yoshitaka Iwasaki

Abstract

In 18th century north America, many Euroamerican people chose to live among Native American tribes during the wars between Native Americans, white settlers of Spain, French and Great Britain. They were called ‘White Indians,’ and many of them were children and women abducted by Native Americans. But there also existed those who entered into native people’s communities voluntarily. Many of them were English Indian Traders who engaged in the deerskin trade for export to Europe, and who wanted to gain more wealth by a closer connection with native people. The case of a Scotch-English trader named James Logan Colbert who traded with the Chickasaw Indian tribe residing in the southeastern part of North American continent and who married three Chickasaw Indian women, and subsequently became the one of tribal leaders, is examined in this paper. As a ‘Red English,’ he was also concerned with furthering the interests of Great Britain on the North American continent, so he fought the British crown’s enemies: thirteen British colonies which rebelled against their home government (later the United States of America), Spain and hostile Indian tribes like the Choctaws.

1. はじめに

イギリスによる北米大陸の大西洋岸への植民地建設は17世紀初頭より本格化した。後のアメリカ合衆国の母体となる12個¹のイギリス植民地群が、既に18世紀

中盤までには設立されていた。

当時のヨーロッパ人たちの多くは、北米大陸の先住民インディアン²は野蛮人であり、文明において劣る彼らを白人のすぐれた文明によって啓蒙し、キリスト教徒にすることこそが当然の摂理であると考えていた。しかし現実にはその反対に、多くの白人、中でもイギリス人がインディアン部族内に定住し、部族民化してしまう事例の方が圧倒的に多かった。このように、白人でありながらもインディアン化してしまった者は、イギリス人社会から「白いインディアン（White Indian）」と呼ばれた。これは、インディアンを巻き込んだヨーロッパ列強間の植民地戦争において捕虜として囚われた白人が、インディアン部族内で暮らす内に同化してしまうという場合が多かった。しかしそれとは別に、自らの意志によってインディアン部族内に定住し、さらに部族のリーダーとして活躍するまでになった者たちもいた³。彼らの出自は多くの場合、インディアン部族と毛皮交易を行うインディアン・トレーダー（Indian Trader）であった。

本稿では、この自ら「白いインディアン」となったインディアン・トレーダーに焦点をあてる。具体的には北米大陸南東部地域に居住する部族、チカソー族（Chickasaw）の白いインディアンとして生を全うした、スコットランド系イギリス人、ジェームズ・ローガン・コルバート（James Logan Colbert、以下コルバート）をとりあげる。彼は何故異民族であるインディアン部族の一員になったのか、そして、もともとイギリス人であった自らのアイデンティティは、彼自身にはどのように認識されていたのか、ということ考察したい⁴。そこで次節では先ず、当時のインディアン・トレーダーと白いインディアンの実態について述べたい。

2. インディアン・トレーダーと白いインディアン

18世紀の北米大陸において覇権を争ったイギリスとフランスは、それぞれインディアンのプロテスタントもしくはカソリックへの改宗を試みた。結果としてはフランスの布教のほうがより成功を収め、多くのインディアンのみならず、フランスの俘虜となったイギリス人までがカソリックへ改宗するという事態が生じていた。しかしこれよりもさらに多かったのが、イギリス人やフランス人がインディアン化する事例であった。

北米植民地戦争において、イギリスとフランスはそれぞれに友好的インディアン部族を味方に引き入れて戦った。フロンティアにおいてインディアン部族の捕虜になった白人男性は、捕虜として引き渡されるか、親類縁者が身代金を支払うまで人質として抑留された。しかし囚われの身となった者たちの内、女性や子供

だけはインディアン部族に引き取られ、部族民の妻あるいは養子とされた。彼らは数年の内に、容姿・風俗・言葉の上でインディアンと見まがうまでに、インディアンの文化に溶け込んでいった。中でも幼少期にさらわれ、部族内で成年した子供たちのインディアン化は著しく、戦争終結後に縁者のもとに返還された後も白人社会になじまず、すぐ脱走してインディアン部族のもとに戻ってしまうことがほとんどであったという。白いインディアンとは、通常このような者たちのことをいう。これとは逆に、白人社会に囚われたインディアンの子供の場合、西欧文明に一切なじまず、もとの部族への逃亡が相次いだという⁵。

しかし戦後、虜囚の身から解放された後も部族に残留したり、インディアンとの交易を行う過程で部族内に永住して部族女性との間に子をもうけるなど、主体的かつ積極的にインディアンとして生きる途を選んだ者もいた。彼らは、囚われの後にインディアン化した前述のような白人女性と子供と比べて、数においては及ばぬものの、やはり白いインディアンと呼ばれた。そして、このような者の多くはインディアン・トレーダーであった⁶。

銃、斧、ナイフ、紅染料、衣類や毛布などのインディアンが珍重する西欧の工業生産品と交換に、当時北米大陸からヨーロッパへの主要な輸出品のひとつであった鹿皮を確保する、いわゆるインディアン毛皮交易にたずさわる者には、卸商人 (wholesale) 小売り商人 (retail storekeeper)、部族内駐在トレーダー (resident trader) 等がいた。また部族内駐在トレーダーの補助として、運搬夫 (packhorseman)、運搬船の船頭 (boatman)、雇い人夫 (wage labor) や奴隷 (slave labor) が関わった。この中で、部族内駐在トレーダーは、植民地から出ることなく本国との輸出入にたずさわる商人に対し、その出先代理人として実際にインディアン部族のもとへ赴いた。普通彼らは春に部族の集落を訪れ、そこに滞在しながら、インディアンがトレーダーから受取った銃弾薬を用いて狩ってきた鹿皮を集める。鹿皮は、7~15人程度のイギリス人と50~100頭近くの馬からなるインディアン・トレーダーのキャラバンによって、大西洋岸やメキシコ湾沿いの港町へと運ばれ、商人に渡される。夏の終わりが初秋になると、トレーダーはインディアンへ渡す西欧産品と次年度の狩猟に用いる銃と弾薬の補給分を持ち、自分の担当する部族の村落へと戻るのである。いわゆるインディアン・トレーダーとは、このような部族内駐在トレーダーのことを指す⁷。

インディアン・トレーダーが何故インディアン部族に同化したのかについては、いくつかの理由が考えられる。まず彼らは、植民地を離れない商人とは異なり、定期的に植民地の西の奥地にあるインディアン部族集落を頻繁に訪れ、彼らと交友を保たなければならない。彼らはそのため、辺境を旅するのに最も適した

インディアンの服装から、ひいては彼らの文化習俗まで、柔軟に取り入れていった。例えば、コルバートと同じくチカソー族に関わったイギリス人トレーダーで、当時の北米インディアンの風俗を今に伝える貴重な記録『アメリカ・インディアンの歴史』⁸の著者としても知られるジェームズ・アデア（James Adair）は、部族の信頼と友好を勝ち得るためにチカソーの風習を受容することを勧めている。前述のコルバートを含むトレーダーたちが部族の風習を遵守することに努めた結果、部族民は異民族のトレーダーたちを部族の中に受け入れ、彼らと部族女性が結婚することを許した。さらに、そこから生れた混血子たちも、チカソーの血を引くものとして部族の一員と認められた⁹。

トレーダーの多くは若く野心に富んでいたので、部族との交流を深めるためには部族女性、特に部族内で指導的地位にある家系の娘と結婚することも辞さなかった。部族の言語を学習するには、それが最も手取り早い方法であった。またトレーダーの妻となった部族女性は通訳として、夫とインディアンの同胞との間の架け橋となった。花嫁の属する家柄の影響力によって、部族との交易が容易になったことはいうまでもない。チカソー族の結婚風習を一例にあげれば、求婚者はまず娘の両親に布の束を贈る。ここで親が贈り物を拒否しなければ、布はそのまま娘に渡される。彼女がそれを受取れば求婚が受け入れられたことになり、2人は夫婦たることを公に認められるのである。トレーダーたちにとって、競争相手の部族男性より布を手に入れるのに有利な立場にあったことは言うまでもない¹⁰。

北米のヨーロッパ人にとって、対インディアン交易は短い期間に大きな富を獲得できる手段であった。例えばサウス・カロライナ植民地¹¹の経済はヨーロッパへ輸出する換金作物としての米・インディゴ栽培と並んで、インディアン部族との鹿皮交易が支えていた。カロライナに加え、ヴァージニアやジョージアといった南部植民地のトレーダーたちは、植民地の西に広がるフロンティア深く、人口、勢力共に大きな4部族 チェロキー（Cherokee）、チョクトー（Choctaw）、チカソー、クリーク族 との交易を目指して部族の中へと乗り込んでいった。そしてトレーダーの大多数は、フロンティアでの一攫千金を夢見るアイルランドおよびスコットランド人であった¹²。

そこで次節では、チカソー族と交易するトレーダーにすぎなかったコルバートが、部族指導者にまでのぼりつめる過程を、具体的にみてみたい。

3. 白いインディアンから部族リーダーへ

1738年、サウス・カロライナ植民地の海岸沿いの町サヴァンナに、1隻の船が

到着した。その船の名はプリンス・オブ・ウェールズ号といった。その乗船者たちの多くは、名誉革命によってイギリスの王座を追われたスチュアート王朝の復活を目論むジャコバイト（Jacobite）と呼ばれるスコットランド人であり、1715年に起こした反乱に失敗後、故国を棄てて新大陸へと渡ってきた者たちである¹³。

彼らの一部はほどなくしてインディアン・トレーダーとなり、交易相手のインディアン部族の中に定住し、部族の女性と婚姻して子をもうけ、自身のみならず、その子らも後に北米大陸におけるイギリス政府のインディアン政策に多大な影響を及ぼすことになる。例えばラクラン・マギリヴレイ（Lachlan McGillivray）は、合衆国南部のインディアン諸部族と交易するトレーダーとして頭角をあらわし、後にアラバマ、ジョージア一帯に広大なプランテーションを経営するまでになった。また彼はその一方で、同じスコットランド出身のサウス・カロライナ植民地総督ジェームズ・グレン（James Glen）の対インディアン政策を補佐した。彼はクリーク族の女性と結婚し、その息子アレクサンダー（Alexander）は後に合衆国史に名高いクリークの大家長となった。また、ロデリック・マッキントッシュ（Roderick McIntosh）はイギリス政府のクリーク族派遣大使となり、その息子ウィリアム（William）も19世紀初頭にクリークの著名な混血族長となった。ロデリックと共に新大陸の地を踏んだ兄弟のジョン（John）は、イギリス政府によるチカソー族およびチョクトー族派遣大使の地位につく¹⁴。

ジェームズ・ローガン・コルバートは伝承によれば、1721年スコットランドに生れ、このプリンス・オブ・ウェールズ号に乗って北米大陸へと渡ったとされている¹⁵。彼はその後かなり早い時期にチカソー族との鹿皮交易で西に向かうカロライナのインディアン・トレーダーの一行に加わり、最終的にチカソー領内に拠点を置くトレーダーとなった。彼がいつ頃からチカソー領内に定住するようになったかは、不詳である¹⁶。彼をよく知るアデアによれば、コルバートはチカソー内に「子供の頃から住んでおり、英語より流暢に彼らの言葉を話し」ていたということである¹⁷。彼は都合3人の部族女性を妻として娶ったが、最初の2人は純血部族民で、最後の1人だけは混血女性であった。その結果生れた6人の息子と2人の娘の名が、今に残されている¹⁸。

当時のチカソー族は、16世紀中頃に北米南東部地域を探検したスペインのエルナンデ・デ・ソート（Herando de Soto）の一行を武力で撃退して以来、この地域で最も勇猛な部族として名を馳せていた¹⁹。それと同時に、チカソーは北米を縦断するミシシッピ河流域に散住するインディアン諸部族との交易にも積極的にたずさわり、その結果チカソー語はこの地域一帯で交易公用語として使われるまでになった²⁰。イギリスは17世紀末期から18世紀初頭より、西欧物産品の供給と毛

皮交易を通してチカソーとの友好関係を維持しており、チカソーはイギリスに協力して、北米大陸の覇権をめぐりイギリスと敵対するフランスと、それに協力する他部族²¹と幾度も戦った。チカソーは、ミシシッピ河一帯におけるイギリスの最も強力な同盟者であった²²。

チカソー族においては、政治決定における最高機関たる部族会議を統括する大族長と各地域を代表する族長たちは、厳格な血族集団、クラン（clan）の制に基づいて選ばれた²³。しかし、部族内で何らかの功績をあげた者は例外的に、血筋に関わらず、たとえチカソーの血を引く者でなくても、戦士たちを率いる指導的立場につくことができた。コルバートは1760年代より、イギリス政府と南部インディアン諸部族の間の会談をとりもち、通訳としても尽力した。そのことが結果的に、部族からはチカソーの利益に寄与したと評価されたのかもしれない。あるいは、それ以前に頻発していた対チョクトー戦争にイギリス人トレーダーたちも参加していることから、そこで何らかの軍事的な功績をあげた可能性もある。コルバートは1761年には、はやくも11名の戦士を率いる立場となって、チェロキー族に包囲されたイギリスの砦の救援に赴いている²⁴。

1766年の記録によれば、当時チカソー族内に居住していたイギリス人は計29名で、その内訳はトレーダーが7人、運搬夫が22人であった。コルバートの名はトレーダーの中に記されているが、部族指導者のひとりとなり、また後にはその混血子たちまでが部族政治を担うことで名を残したのは、リストの中ではコルバートだけだった²⁵。

彼は、イギリス政府の北米南部地域インディアン業務監督ジョン・スチュアート（John Stuart）、対チカソー、チョクトー族派遣大使ジョン・マッキントッシュといった植民地の有力者との交友関係をもつ一方、部族内において畜牛を飼育し、55人²⁶もの黒人奴隷を使用するプランテーションと、大邸宅を営んだという²⁷。

コルバートはこのように、イギリスのインディアン・トレーダーでありながら、部族女性との婚姻を皮切りにチカソー族のリーダーの1人として、その地位を高めていった。そこで次には、大陸におけるイギリスの覇権を脅かす危機 アメリカ独立戦争 において、彼がどのように行動したのかをみてみたい。

4. 祖国と部族のための戦いと挫折

イギリス本国政府と北米植民地の間で軋轢が高まり、植民地の独立宣言を皮切りにアメリカ合衆国の独立へと至る1770年代から1780年代にかけて、本国政府を支持する王党派イギリス人たちは両カロライナ、ジョージアから追われ、チェロ

キーやチカソーをはじめとするイギリスに友好的な部族へ難を逃れた。当時チカソー内の白人の数は300人程度であったといわれる。帰るべき場を失った彼らの多くは、その後も部族内に定住し続けて白いインディアンとなった。そして新たにピケンズ (Pickens)、アルバートソン (Albertson)、バーニー (Burney)、ラヴ (Love) 姓の王党派イギリス人が、1750年代～60年代にかけて部族内に定住したシーリー、ケンプ、ジェームズ、ペリー (Perry) 家に加わって、混血部族民家系を創り出すことになる。彼らはコルバートの指揮下で訓練を受け、独立戦争に参戦する²⁸。

コルバートの率いる集団は、チカソー部族民200名に王党派イギリス人150名からなり、トレーダー出身のジェームズ (James) ・マグリヴレイ²⁹ およびベンジャミン (Benjamin) ・シーリー、コルバートの息子たち³⁰、トーマス (Thomas) ・ラヴ、サイモン (Simon) ・バーニー、ロバート・トンプソン (Robert Thompson)³¹ といったイギリス人勢力がコルバートを補佐した。彼らは現在のメンフィス近郊、ミシシッピ河の支流沿いにいくつかの根拠地を構え、そこを根城にゲリラ戦に従事することになる³²。

チョクトー、チカソー族派遣大使として³³ 1776年以来主にチカソー領内に定住し、コルバートと共にイギリス政府との友好関係持続に尽力していたジョン・マッキントッシュが1780年に死去した後、コルバートが正式な任命のないままその職務を事実上引き継いだ。南部地域インディアン業務監督ジョン・スチュアートの死後 (1789年) 南部のイギリス勢力を統括していた英領フロリダ司令官ジョン・キャンベル (John Campbell) 少将から、コルバートはイギリス軍大尉に任命された。これによって彼は、イギリス国王の敵と戦うためにインディアンと王党派イギリス人を指揮する権限を正式に得た³⁴。

当時チカソー族内部には、大陸で今起こっている戦乱にどのように対処するかという点に関して、意見を異にする3つの部族内勢力があった。そのひとつは、部族の西部と南部に広がるルイジアナを領有するスペインに味方することを主張する一派で、それを率いるのは純血の部族指導者、ウラカベ (Ugulaycabe)、別名ウルフス・フレンド (Wolf's Friend) であった。クリーク族の傑出した大族長となっていたアレクサンダー・マグリヴレイは、チカソーやクリーク、チョクトー等の南部諸部族がこぞってスペインと手を組むことで、13植民地のアメリカ人に対抗しようという考えをもっていた。ウラカベはこのマグリヴレイと連絡をとっていた。大族長のチニビー (Chinubbee, Tinebe) も、ウラカベを支持していた。その一方で、同じく純血の部族指導者ピオミンゴ (Piomingo) の率いる一派は、若者たちの支持の下、イギリスにかわって新たに覇権を握ろうとしているアメリカ

に協力する道を選ぼうとしていた³⁵。

しかし、部族内イギリス人集団を含むコルバートの率いる武力勢力は、ウラカベ、ピオミンゴの2勢力のどちらとも異なり、従来通りイギリスへの助勢を主張し、実際にアメリカとスペインに対する戦闘を開始した。このためチカソーは、表向きにはコルバートの集団を代表として、イギリス側で戦うことになった。この事態に他のチカソーの部族指導者たちはなす術もなく、これはコルバートの権勢が当時部族内でどれほど大きなものであったかを示すものであろう。

アメリカ独立戦争が1775年4月に勃発し、コルバートの一団はチェロキー族のトレーダー、ナサニエル・ギスト (Nathaniel Gist) と共に、馬100頭分の弾薬をイギリス側についたチェロキー族へ運んだ³⁶。1780年から81年にかけての冬には、チェロキーによるアメリカ人集落の襲撃にも参加した。同年5月は、ミシシッピ河沿いに位置する、ヴァージニア邦知事トマス・ジェファソン (Thomas Jefferson) の命によって建立されたジェファソン砦 (Fort Jefferson) を攻囲したが、コルバートの負傷によって撤退した³⁷。

1779年6月になるとスペインがアメリカ側についてイギリスに宣戦布告したため、コルバートらはミシシッピ河を南北に通行するスペイン船を、しばしば拿捕するようになった。その中でも最大の戦果となったのは、1782年5月のスペイン船捕獲であった。これにはセント・ルイス駐在のスペイン軍司令官の妻とその息子たちが乗っており、コルバートは彼らを入質にスペイン領ルイジアナ総督ミロ (Miró) に交渉を迫った。彼の要求は、1779年にスペインによって占領されたナチェズにおいて、キャンベル將軍の指令で1781年に反乱を起こして失敗し捕虜となったイギリス人たちを、解放することであった。総督への書簡の中で、総督がコルバートの一団をナチェズの反乱者を援ける無法者の集団とみなしたことに抗議して、コルバートは自分には「イギリス軍大尉」として「イギリス国王の敵と戦」い、ナチェズのイギリス臣民を援ける権限があると主張した³⁸。

総督ミロは、コルバートの集団と残りの部族民が結びついて、部族全体でスペインに敵対するという事態になるのを恐れた。チカソーの武名がそれだけ名高かったということであるが、彼はコルバートと他の部族内勢力が結ぶことにでもなれば、それに対抗するために1000人も必要になると踏んでいた。そのためミロは、コルバートの脅迫には屈しない姿勢を示しつつ、その一方でコルバートと他の部族指導者たちの離反を工作し、また直接にチカソーを攻撃することも避けた³⁹。

翌1783年もコルバートはスペイン領ルイジアナの軍事拠点に対する攻撃を続けたが、9月にイギリスとアメリカ合衆国、フランス、スペインとの間に講和が成

立し独立戦争が終結したため、捕虜を解放して部隊を解散した。イギリスの大義のためイギリス人とチカソー族を率いたコルバートの、アメリカ人とスペイン人に対する戦いは、ここに終わりを告げた⁴⁰。

独立戦争でイギリス側について戦ったインディアン部族は、戦後は何の見返りもないままイギリスの保護と援助の手から放り出されたが、コルバートも例外ではなかった。合衆国南東部地域に勢力圏拡張をねらうスペインは、戦争中彼らを苦しめたコルバートに対し、戦争中に捕獲したスペイン船舶およびその積荷の損害に対する賠償を要求した。南東部地域から撤退したイギリスは、これに何の援助の手も差し伸べなかった。10月、コルバートは交渉のために息子のジェームズを連れ、講和条約によってスペイン領となったフロリダへと赴いた。11月に彼はその地より、パハマに商館を置くミラー、ボナミー会社（Miller, Bonhamy & Company）のジョン・ミラー（John Miller）に宛てて、自分では払えない程の莫大な賠償金をスペインから要求されている窮状を訴え、金銭の援助を乞う手紙を送っている⁴¹。

コルバートは12月にフロリダを発ち、ラクラン⁴²の息子、クリーク族大族長アレグザンダー・マグリヴレイと会った。前述のように、マグリヴレイは部族存続の途としてスペインとの提携によって合衆国に対抗することを謀っていた。それとは逆にコルバートは、イギリスなき後は今度は合衆国への接近を意図していた⁴³。マグリヴレイの妻の姉妹がコルバートの息子⁴⁴と結婚していた関係もあり、両者は近い関係であったが、新興のアメリカ合衆国と協調するのか、スペインの力を後ろ盾にして対抗するのかという点において、2人は自分の属する部族をそれぞれ違う道へといざなおうとしていた。しかし、コルバートがその帰趨をみることはついになかった。彼はマグリヴレイと別れた後、チカソー領へと戻る途中で落馬によって死去したのである⁴⁵。

5. おわりに

植民地時代、野心に富むインディアン・トレーダーたちは富を求めてフロンティアへ分け入っていき、その過程で柔軟にインディアンの文化を取り入れ、彼らの中に溶け込んでいった。既に述べたように、コルバートは、北米大陸を舞台とするスペイン、フランス、アメリカ、またそれぞれの支援するインディアン部族との戦争においては、常にイギリスを支援する立場にまわった。アメリカ独立戦争において、部族内には彼と論を異にする諸派があったにもかかわらず、コルバートの存在によって部族がイギリス側にとどめおかれたという事実は、彼のイギ

リスに対する忠誠を示すと同時に、部族内における彼の影響力の大きさを示すものといえよう。またコルバートは、前述のスペイン人総督ミロ宛ての手紙にあるように、自分は国王の敵と戦うイギリス軍の大尉であるとしていた。

しかしながら、その死の直前にフロリダからイギリス人ミラーへ送った手紙の中では、守るために戦い続けたイギリスから裏切られたという、彼の苦い思いも伺える。曰く、自分は懸命に援助して守った権力から見捨てられ、怒り狂った敵の手中で危険にさらされている、と⁴⁶。

白人社会から遠く離れたインディアン部族の中で生き、強力な部族指導者として活躍した彼は、まさしく白いインディアンであった。しかしそれと同時に、彼は故国イギリスのために部族を率いて戦いつつも、その想いが報われることなく終わった。いうなれば彼は「赤いイギリス人 (Red English)」⁴⁷でもあったといえよう。それに対し、その後を継いだ混血の息子たちは、父からヨーロッパ人の血を受け継ぐ白いインディアンではあったかもしれないが、決して「赤いアメリカ人」とはなり得なかった。彼ら混血子たちのアイデンティティの変遷については、また稿を改めて論述したい。

注

1. 独立宣言を行ったのは13植民地であるが、13番目の植民地となったデラウェア (Delaware) は1776年にペンシルヴァニアより分離したので除く。
2. 現在では北米先住民、ネイティブ・アメリカンと呼ばれることも多いが、本稿では当時の一般的呼称に従い「インディアン」と呼称する。
3. また、彼らが部族女性との間にもうけた子供たちの多くは、部族内における混血部族民勢力として発言権を増し、18世紀後半から19世紀にかけて部族内で指導的立場につくことになる。
4. インディアン部族の一員となったインディアン・トレーダーに関する研究は警見の限り、クリーク族 (Creek) の一員となったスコットランド系イギリス人トレーダーを扱った以下の著作である。Edward J. Cashin, *Lachlan McGillivray, Indian Trader: The Shaping of the Southern Colonial Frontier* (Athens, Georgia: The University of Georgia Press, 1992). ジェームズ・ローガン・コルバートについては、19世紀前半にチカソー族政治において大きな影響力を振るったコルバート家の開祖として言及されることはあるものの、警見の限り、彼を中心に取りあげた研究はない。ただし、“The Colberts,” available from TheColberts.html/www.novia.net; Guy B. Braden, “The Colberts and the Chickasaw Nation,” *Tennessee Historical Quarterly*, 17,

- No.3(1958), 222-226; Don Martini, *Chickasaw Empire: The Story of the Colbert Family* (unpublished, 1986)には比較的網羅的な彼の伝記がある。また「白いインディアン」に関する研究としては、James Axtell, *The Invasion Within: The Contests of Cultures in Colonial North America* (New York and Oxford: Oxford UP, 1985), Chapter 13: The White Indians; Axtell, *White Indians of Colonial America* (Fairfield, Washington: Ye Galleon Press, 1991)などがあるが、それらは主に、囚われた白人の子供・女性のインディアン化を対象としている。インディアン・トレーダーに関しては、白井洋子「ペンシルヴェニアのインディアン・トレーダー研究について 1750、60年代を中心に」『アメリカ史研究』第4号(1981年) 25-36ページがあるが、これは北部・中部のトレーダーについての記述で、同じく北米大陸の鹿皮交易の一翼を担った南部トレーダーに関するものではない。
5. 北米大陸のイギリス人とフランス人入植者内に起こったこのような事態は1740年代後半より報告されている。Axtell, *Invasion* 302-303; Axtell, *White Indians* 6-18.
 6. Axtell, *Invasion* 302-304.
 7. Kathryn E. Holland Braund, *Deerskins & Duffels: Creek Indian Trade with Anglo-America, 1685-1815* (Lincoln & London: The University of Nebraska Press, 1993) 81-82.
 8. James Adair, *Adair's History of the American Indian* (Johnson City, Tennessee: Watauga Press, 1930)
 9. Axtell, *Invasion* 303-304; Wendy St. Jean, "More Than a Love Affair: Chickasaw Women and Their European Husbands in the Eighteenth Century," *The Journal of Chickasaw History*, Vol.10, No.4 (1995), 11.
 10. Axtell, *Invasion* 303-304; Michael P. Morris, *The Bringing of Wonder: Trade and the Indians of the Southeast, 1700-1783* (Westport, Connecticut and London: Greenwood Press, 1999) 13, 17; J. Leitch Wright, Jr., *The Only Land They Knew: The Tragic Story of the American Indians in the Old South* (New York: The Free Press, 1981) 235.
 11. 1729年にノース・カロライナ (North Carolina) とサウス・カロライナ (South Carolina) に分離。
 12. 有賀貞・大下尚一「イギリス領北アメリカの発展」有賀貞他編『世界歴史大系 アメリカ史1 17世紀～1877年』山川出版社、1994年、45、68ページ；Axtell, *The Indians New South: Cultural Change in the Colonial Southeast* (Baton Rouge: Louisiana State UP, 1997) 49; Braund, 81-82; Morris, 72-73.
 13. ジャコバイトとその反乱については、Daniel Szechi, *The Jacobites: Britain and Europe, 1688-1788* (Manchester and New York: Manchester UP, 1994)を参照。
 14. J. Norman Heard, *Handbook of the American Frontier: Four Centuries of Indian- White*

- Relationships, Volume I : The Southeastern Woodlands* (Metuchen, New Jersey, and London: The Scarecrow Press, Inc., 1987) 165, 232; Martini, 1.
15. このことは19世紀後半よりコルバートの子孫が主張している。その一方で、北米植民地生まれとする説もあり、真偽は不明である。“The Colberts”; Martini, 1.
 16. これには諸説あり、1741年、1743年とする説がある。John Walton Caughey, *Bernaldo de Gálvez in Louisiana, 1776-1783* (Gretna: Pelican Publishing Company, 1934,1972) 228; Caughey, *McGillivray of the Creeks* (Norman: University of Oklahoma Press, 1938) 68; Martini, 4.
 17. “The Colberts”; Martini, 1.
 18. 最初の妻（純血部族女性）との間に、サリー（Sally）、2番目の妻（純血部族女性）との間にウィリアム（William）、ジョージ（George）、リーヴァイ（Levi）、ジョゼフ（Joseph）、サミュエル（Samuel）、3番目の妻（混血部族女性）との間にはジェームズ（James）、スーザン（Susan）が生まれた。この内ジョージ、リーヴァイ、ジェームズは19世紀前半にかけて有力な部族指導者となった。中でもリーヴァイは部族全体を統括する大族長に比する権勢を持つようになった。詳しくは岩崎佳孝・岡本勝「文明化に対するインディアン部族の対応 1820年代におけるチカソー族文明化学校の事例」『欧米文化研究』第4号（1997）、28-29ページ；岩崎「1812年戦争後のインディアン政策とアンドルー・ジャクソン 1818年チカソー条約を中心に」『中・四国アメリカ学会創立25周年記念論文集』（1999）60-61ページ；および“The Colberts”を参照。
 19. ちなみに、現在のアメリカ合衆国におけるチカソー族の自治政治組織体であるチカソー・ネイション（Chickasaw Nation）のモットーは“Unconquered and Unconquerable”である。
 20. チカソー・ネイション博物館長グレンダ・ガルヴァン（Glenda Galvan）氏とのインタビュー（1999年8月26日）による。
 21. 中でも、チカソー領の南部に位置し、先祖を同じくしながらも部族民数においてははるかに勝るチョクトー族が最も強大な敵であった。
 22. Axtell, *New South* 50; W. David Baird, *The Chickasaw People* (Phoenix: Indian Tribal Series, 1974) 12-23; Martini, 2.
 23. 大族長を出すことのできるクランは、ミコ（MicoあるいはMinkoとも書く。チカソー語で「族長、王」の意）・クランに限られていた。前述ガルヴァン氏とのインタビュー；Pamela Munro and Catherine Willmond, *Chickasaw: An Analytical Dictionary* (Norman and London, University of Oklahoma Press, 1994) 243.
 24. Martini, 3-6.
 25. 使役運搬夫の中には、後にその子らが混血部族民指導者となるシーリー（Sealy）、ケンプ（Kemp）、ジェームズ（James）の名が既にみられる。またトレーダーの欄には前述のアデアの名もみられる。*Chickasaw Traders in 1766*, available

- from http://www.flash.net/~kma/Chick_Traders.html
26. 奴隷の数については150人という説もある。“The Colberts”; Caughey, *Bernaldo* 228.
 27. Colin G. Calloway, *The American Revolution in Indian Country: Crisis and Diversity in Native American Communities* (Cambridge: Cambridge UP, 1995) 221; Caughey, *McGillivray* 68.
 28. Calloway, 229; Martini, 6-7.
 29. コルバートの息子リーヴァイとの親交が深かった白人、J・N・ウォルトン (J. N. Walton) の証言によれば、ジェームズ・マグリヴレイは同姓のクリーク族のトレーダー、ラクラン・マグリヴレイとは関係ないとされている。しかしチカソー、チョクトー大使ジョン・マッキントッシュを含めた3人を縁戚関係とする資料もあり、真偽は不明である。J. N. Walton — *Letters on Chief Levi Colbert - 1882-1883*, available from <http://www.flash.net/~kma/walton.htm> ; Martini, 12.
 30. 具体的に誰であったのかは不明であるが、ウィリアム、ジョージ、リーヴァイのいずれかは参加していたと思われる。
 31. コルバートの息子とトンプソンのみは混血であった。
 32. Martini, 6-8.
 33. 正式名称はCommissary to the Chickasaw and Choctaw Nation.
 34. Martini, 6-8; Cecil L. Sumners, *Chief Tishomingo: A History of the Chickasaw Indians, and some Historical Events of Their Era* (Amory, Mississippi: Amory Advertiser, 1974) 55-56.
 35. “Alexander McGillivray, Piomingo and George Washington,” *The Journal of Chickasaw History*, 5, No.3 (1999): 4-5; Calloway, 229; “The Colberts”; Gary D. Childers, ed., *The Last of Chickasaw Kings: Taken from a Collection of Historical Writings, Notes, Letters and Other Records by D. Ferguson* (Ada, Oklahoma: Chickasaw Nation, 1999)
 36. この補給によって、チェロキーは7月にテネシー中・東部一帯のアメリカ入植地に対する有名な襲撃を行った。
 37. しかしながら、この後ヴァージニアは砦を放棄した。Braden, 224; Martini, 7-9.
 38. Colbert to Miró, October 6th, 1782. in Braden, 225; Martini, 7,9-10. スペイン総督は交渉を拒否し、3週間後にコルバートは捕虜を解放した。この事件の顛末は、Caughey, *Bernaldo* 215-242; D.C.Corbitt, “James Colbert and the Spanish Claims to the East Bank of the Mississippi,” *The Mississippi Valley Historical Review* 24, No.4(1938): 457-472. に詳しい。
 39. Calloway, 229-230.
 40. Martini, 10.

41. Colbert to Miller, November 12th, 1783. in Martini, 11-12.
42. 1775年、イギリス王党派の故に迫害を受け、故国スコットランドへ戻った。Heard, 232; Martini, 12.
43. コルバートの死後、部族政治における発言権を増した彼の息子たち ウィリアム、ジョージ、リーヴァイ、ジェームズらは合衆国に協力する方向に部族を導いていくことになる。1784年にウラカベがスペインと友好条約を結ぶ一方で、ピオミンゴとコルバート家は1786年に合衆国との友好条約に調印する。
“Alexander McGillivray, Piomingo and George Washington,” 4.
44. おそらくは、アレクサンダー・マギリヴレイと親しかったジェームズであると思われる。
45. Caughey, *McGillivray* 212; Martini, 10-12; “The Colberts.”
46. Colbert to Miller, November 12th, 1783. in Martini, 11-12.
47. 警見の限りこれは筆者による造語である。本稿で分析したように、白いインディアンとなったインディアン・トレーダーのアイデンティティを反対から見直せば、このような言葉で表現し得るのでなかろうか。